



新たな教師の学びを体現する記録と対話のコミュニティの創発

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園 連合教職開発研究科

研究科長 木村 優

2023年4月1日付で研究科長に就任いたしました。2008年度とその前夜からみなさまとともに積み上げてきた本研究科の歴史の重さ、そして本研究科が掲げる日本および世界の教師教育改革を支え促す使命の重さを改めて胸に刻みながら、本研究科のさらなる発展に力を尽くしていきます。

とはいえ、あまり気を張りつめ過ぎないように、関係各位のみなさまの力をお借りしながら、みなさまと学び合いながら、研究科のマネジメントと学びづくりを協働で進めていこうと思います。また「研究科長」として、私自身が積極的に学校と先生方との協働研究に力を入れて取り組んでいきたいと思っています。

さて、教育、学校、そして子どもたちと教師たちをめぐる状況は、この2023年度から新しい局面に突入していきます。特に、現在の知識社会における教師の役割はますます重要度を高めています。国内では、「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿として「変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶ主体的な姿勢」が提唱されました。そして、新たな教師の学び姿の実現に向けた教員養成・採用・研修、教師教育のあり方の見直しと高度化が広く求められています。

教師をめぐる変革の状況は世界に目を向けても同様です。世界中のどの国・地域に目を向けても、社会

の創設者 (founder) であり変革者 (change maker) である専門職としての教師への期待は高まるばかりです。21世紀の個人・社会・世界・地球のウェルビーイングの実現は、変革と解放と民主主義の実現をもたらす教師の力にかかっています。

教師は学び・教え・探究の専門職として、子どもたちの学習環境を安心安全で学び合う文化が生まれるように整え、多様性を保障してインクルーシブを実現し、学校の学びを地域社会や世界へと拡張し、デジタルを適切に活用し、同僚とチームで働きながら学校の組織学習を推進して、子どもたちの個別最適で協働的な学びをカリキュラムと授業でデザインし保障していくことが求められます。

ところが、こうした期待の裏側で教職を脱専門職化する傾向も世界中で示されています。教師不足への対応や公財政教育支出の不足から、十分に専門職としての学びを深めていない、あるいは免許や資格を持たない教師が増加しつつあります。また、教師の専門性を学問知識と教授スキルにだけ矮小化して捉

内容

巻頭言	(1)
修了生の言葉	(3)
修了生に贈る言葉	(9)
スタッフから贈る言葉	(10)
退任にあたって	(11)
年間予定表	(14)

えたり、教師の仕事が標準テストへの子どもたちの準備対応に限定したりすることで、専門職としての教師の自律性が制限される事態も起こっています。

こうした教職の脱専門職化の動きは、現代社会にとっても未来社会にとってもただただ損失でしかありません。私たちは専門職としての教師の社会的地位をより一層高めながら、教職の脱専門職化を覆していくイニシアティブを発揮していく必要があるのです。そのために、私たちは教員養成・採用・研修、教師教育のあり方(目的や方法を含む)を改めて考え直す必要があります。

教員養成・採用・研修、教師教育のあり方について、本研究科がこれまで一貫して提案してきたのが「記録と対話のコミュニティの創発」です。

教師は、自らの個別の教育実践を自律的・主体的に省察し続けながら、そこで立ち現れる複雑で難解な諸課題を、独力で解決しようとするのではなく、同僚をはじめ学校のマルチ・ステークホルダーと協働探究していく必要があります。この協働探究を実現することで、教育実践の諸課題の解決に資する知識やスキル、実践の中の理論が「集団知性」として学校に蓄積・共有・循環され学校の組織学習力が向上します。そして、この組織学習のもとで教師一人一人が自らの成長ニーズに沿った個別最適で協働的な学びを通して専門性開発を進める機会が保障されることになります。

こうした状況を実現し保障するには、教師が自らの実践の省察を幾重にも重ねることが可能な実践の記録化とそれにもとづく共創的な対話が有効です。教師が子どもたちとデザインし実践した授業とカリキュラムの中で、子どもたちがいかに学びを展開し、教師が子どもたちの学びに応じていかにして実践の改善や調整を行ってきたのか、教師と子どもたちが織りなす一連の学びのストーリーを多層に省察して描き出すのが実践の記録です。

そして、教師が省察を幾重にも重ねた実践の記録を仲間に物語り、仲間とともに実践を再構成・共創し

ていく対話の機会を生み出すのです。実践の記録という確かな根拠があることで、対話における協働の学び・探究・省察の質が向上することになります。この実践の記録とそれにもとづく対話による教師たちの協働による実践省察は「日本型学校教育」として大正自由教育の時代から連綿と続く日本の教師文化・学校文化でもあります。

しかし、現実の学校の人的・物的リソースは十分とは言えず、記録と対話に欠かせない教師の時間もまた日々の業務の限られた時間の中で多く生み出すのは難しいものです。そのため、実践の記録を描くことは教師個人に負担をかけるのも事実で、実際に実践を記録する文化と仕組みを手放した学校も少なくありません。一方で、多くの学校でこれまでも対話ベースの校内研修・授業研究が行われてきています。こうした対話の中に、学校の限られた人的・物的・時間的リソースの限界を超えて、実践の記録をどのように効果的に組み込み、あるいは組み込み直し、教師の学びと省察の土台にすることができるのか、すなわち新たな教師の学びを体現する「記録と対話のコミュニティ」をいかに学校の文脈に応じて創発できるのか、この問いをみなさんと協働探究していけたらと思います。

私たちが生きる21世紀はもう四半世紀を迎えようとしています。科学技術とグローバル化の進展は加速度を増し、私たちの世界を取り巻く状況は目まぐるしく移り変わっています。この21世紀の世界の変化は、好ましいものもあればそうでないものもあります。私たちがより良い世界を形作っていくためには教育の力を最大限に発揮していくことが必要で、そこで教育のエージェントである教師の力が不可欠になります。

今こそ、私たち自身のエージェンシーを見つけ、育み、子どもたちや同僚たちとともに世界のウェルビーイングを実現する協働探究をさらに推し進めていきましょう。



修了生の言葉



悩み続ける中で見えてきたこと

授業研究・教職専門性開発コース 2022年度修了生

揚原 佑

こんにちは。2020年度から2023年度の3年間、授業研究・教職専門性開発コースで学びを修めていました揚原佑と申します。

私は学部4年次の教育実習の際に指導教諭のすすめを受けて、教職大学院に進学することを決めました。3年間の院生生活は常に悩み続け、そして苦しみ続けた3年間だったと振り返ります。

教育観や授業観の転換を求められたことが1番自分にとって大きな苦痛を伴った要因でした。

社会の変革に伴い、求められる教育は段々と変化していきます。

18世紀後半の産業革命期であれば、言われたことを再現性高く行うことが出来る、工場の生産ラインに勤めるような人材を育成するような教育をする必要がありました。しかし現在ではそうした人材はロボットやAIに取って代わられてしまうという社会が予想されています。

そこで教師は未来を生きる子ども達に対してどんな教育をしていくことが、生徒たちにとって、そして社会にとって、より良い幸福(well-being)に繋がるのかを常に問い続け、教育観や授業観をアップデートしていくことが教師は必要になることをこの教職大学院で学びました。しかし変えるということとはそんなに簡単なことではありません。今までの過去を否定して、新しいことに挑戦するということは苦痛を伴います。これで良いのかな？とふわふわした宙ぶらりんの状態になったりもします。そんな状態で

それを継続し続けることは生半可な覚悟ではできないことです。そこで大事になるのは、同じ志をもった挑戦し続け、変化し続けようとする仲間、つまり「コミュニティ」の存在が重要になってきます。

教職大学院ではこの学びの在り方を問い続ける「コミュニティ」づくりを重視して、様々なカリキュラムが編成されています。同じ授業研究・教職専門性開発コースの院生とで語り合う週間カンファレンス、様々なコースの先生方とで語り合う月間カンファレンス、そして教育に限らず、多種多様な業種の方々や生徒達とも語り合うラウンドテーブルなどカリキュラムを通して色んな人たちと学びの在り方を模索していきます。

その際に語られるのは、主に自身が挑戦してきた実践に関する「省察」です。省察とは自身の授業実践の改善点を見出すのみならず、どんな価値があったのかを価値づけする機会になります。その省察したことを他者に語り、感想をいただく中で、より重層的に実践を吟味していきます。他者に伝わるように語ることは決して簡単なことではありません。事前に自身の実践をより深く、そしてどんな立場の人であっても分かるように十分に噛み砕くような省察をしておく必要があります。そうした重層的な省察を通して自身の授業実践や教育観をアップデートしていくのです。

本大学院は教授法や授業法など「How to」を教えてくれる場所ではありません。上記のように学びの在り方を問い続ける「コミュニティ」づくりや自身の実

践の「省察」を通して、「教育とはどうあるべきか？」を模索し続け、学び続ける教師の在り方を学ぶ、そんな大学院であると考えています。まだ教員としての道は始まったばかりですが、この大学院で学んだことは絶対に教員人生において大きな財産になる、そんな気がしています。

今後大学院生活において色々な困難や大変なことがあると思います。それを仲間とともに乗り越えていって欲しいと思っています。拙文ではありますが、修了生からのメッセージとしたいと思います。のり多い大学院生活になりますことを願っております。

もし、教職大学院を舞台に一つの作品をつくるとしたら？

授業研究・教職専門性開発コース 2022年度修了生

木原 万由子

『もし、この教職大学院を舞台に1本の映画、もしくは1冊の小説をつくるとしたら？』

私はまず、誰を主人公にするか、どのような構成で進めていくか、どのテーマを重きにおくかとても悩んでしまうと思います。共に学んだ仲間たち誰もが強い個性を持ち、それぞれ魅力がある方々だからです。教職大学院の環境はとにかく自力で進んでいかないと難しい場所です。壁があっても霧があっても。そのため、自然と自分自身のあり方を何度も自問自答し、考えを皆に伝えるために言い方や表現の仕方を考えていかざるを得ないです。つまり、自分で自分の物語を進めていく環境です。他人任せではどうしても無理な環境であるため、ここに所属している以上、脇役にはなれません。

私は教職大学院でストレートマスターの皆さんと関わる中で、信念や生き様に触れる機会がとても多かったです。皆と共に過ごして「みんなの物語の続きがみたい」とおこがましくも思ってしまうことは何度もありました。言い換えれば、教職大学院に所属をしていると、まるで複数の映画を同時に鑑賞しながら過ごしている感覚がありました。見ている主人公をその時々で変えて、起きている出来事を楽しみます。誰もが主人公になれる場所です。王道なやり方、正統派なやり方でなくても主人公になってしまう場所であるため、作風に飽きることは決してありませんでした。そして、皆が自分の物語を紡いできた先に、

長期実践研究報告書(以下、長期)の執筆がありました。各登場人物が、これまでの物語を振り返るイベントです。これも、所属する院生が主人公であることが特に出ている部分です。なぜなら、主人公が自ら、悲劇でも喜劇でもメリーバッドエンドでも物語を自由に解釈して書けるからです。私は皆の長期を読む中で、部分的にみたら悲劇で全体的にみたらハッピーエンドの長期が多かったように思いました。読んでいて緊張感で胃が痛くなるようなこと、結末にちょっと安心することは沢山ありました。構成も人それぞれで、読み応えがあります。

教職大学院で過ごすテーマは千差万別です。努力、友情、勝利といった少年漫画のような王道のテーマから恋愛、ゲーム、スポーツ、グルメ、教育、時にはバトルなど多岐にわたります。主人公次第でどこに重きを置くか変わります。多様なテーマと関わりながら、皆は教職大学院の日々を過ごしています。テーマには人それぞれ相性があります。苦手なテーマは試練になります。その時に皆はここで主人公として生き抜くための武器が必要になります。これらは共に学ぶ仲間に見つけてもらっていました。教職大学院には試練の他に数々のイベントがある分、嫌でも自分の弱点や欠点と向き合うことがあります。その分、自分の長所や自分にしか出来ないだろうことを教えてもらい大きく成長する機会もあります。

最後にストレートマスターとして、皆と過ごしたことで生まれたメリットをお伝えします。それは、皆の長期が何倍もおもしろく読めることです。共に学んだ仲間が、とある一つの出来事をそれぞれどのように解釈して取り組んでいったのかを長期で知ることが出来ます。私はこれまで共に学んできた仲間の長期を同時並行で読むことができました。主人公Aさんと脇役Bさんの長期と主人公Bさんと脇役Aさんの長期。お互いの人物像や起きたイベントへの捉え方が少しずつ違って、セットで読むと面白さが倍増します。頭の中で舞台装置を再現して皆が動いているのを見ているような感覚です。まるで、群像劇小説です。ただ、描写はとても生々しいです。ここで起こってきたことが実話であるため。普遍的なエンタメとして容易く消費されない、自分の存在や今後

の生き方と向き合われます。事実は小説よりも奇なりというように、一つの出来事を様々な主人公が多様に解釈する場面は身近なことが一番面白いです。自分事として捉えられるからでしょうか。更に、ストレートマスターは学生同士の関わりが多いです。小説や映画では対応できない複雑なやりとりや心情と向き合います。そのため、振り返りの中で人それぞれ解釈が異なって仲間と楽しく話し合えます。加えて、長期を小説と捉えた時に、その小説の山場に立ち会っていたと知ると何だか得した気分になります。

何千万字のテキストに触れ改めて教職大学院は面白い場所だったんだと振り返っています。主人公の皆さん、共にいてくれてありがとうございました。

生徒と学ぶ楽しさを語りたい

ミドルリーダーコース 2022 年度修了生

カリタス女子中学高等学校

竹中 智子

教職大学院の2年間でたくさんの方と語り合い、たくさんアドバイスを頂いた。私にとってかけがえない2年間になった。

学校での仕事と子育ての両立だけでも大変な中で教職大学院を勧められた時は即答できなかった。しかし、校長が私に出来るかと判断して声を掛けてくださったのだからやってみようと思った。オンラインで参加することが出来たことも、やってみようと思えたきっかけの一つだった。オンラインでの参加は、幼い娘たちに大人になっても学ぶ姿勢を見てもらえたのは良かったと思う。初めのうちは、オンラインでも繋がる事が出来るのが便利だと思ったが、だんだんもっと話したいと思うようになり、福井へも足を運んだ。実際に対面で語り合うと、オンライン以上に実りが多いと感じた。誰かの発言に反応することで話しが広がったり、誰かの問いかけに対して隣の

方と軽く話したり。オンラインではミュートにして通り過ぎてしまう時間が、生きた時間になった。結果的に、オンラインと対面の両方を経験したことでより多くの方と話す機会に恵まれた。

長期実践報告を書き上げるのは、文章の苦手な私にとっては試練だった。しかし、先生方が丁寧に話を聞き、私の中にある思いを引き出してくれたお陰で、何とか形になった。私は、生徒対応をしていく中で「答えは生徒の中にある」という思いで生徒に接するようにしている。進路などにおいても、生徒自身がどのように考えているのかをうまく引き出してあげること、自分のやりたいことやどうすべきか自分で見つけることが出来ると思っている。今回の長期実践報告を書くにあたっては、まさにその状態だった。大学院の先生方が私の思いを引き出してくれ、私の話の核になる部分を一緒に探してくれた。間違

いなく自分で書いたものだが、自分一人では書き上げることが出来なかったであろう文章だ。この感覚を生徒にも味わわせられるような教員になりたい。

また、2月のラウンドテーブルには、生徒とポスターセッションに参加した。長期実践報告にも書いた奉仕活動の様子を発表した。生徒たちは、とても充実した時間を過ごせたと話してくれた。これをきっかけに、別の場所でも発表する機会に恵まれるなど、いまだに広がりを見せている。また、6月のラウンドテーブルには生徒とともに参加したい。生徒とともに

成長していき、学ぶ楽しさを生徒と同じ目線で語り合える関係を作っていきたい。

私の好きな聖歌のひとつに「なかま」という歌がある。歌詞は「♪それぞれが 違う場所で 生まれて育ち 違う足跡を残し 道を歩んできた 強い力によって 道が重なりあって 今ここに集まった キリストのもとにあって ともに祈っている♪」この教職大学院で出会ったすべての人たちに感謝しています。この出会で得た知識、経験をまた新学期から学校生活に活かしていきたいです。

出会いがもたらしたもの

学校改革マネジメントコース 2022 年度修了生

福井大学教育学部附属特別支援学校(元あわら市芦原小学校)

五之治 多美

3月23日をもって教職大学院の学校改革マネジメントコースを修了しました。2年前、教職大学院では、マネジメントとは何かを学び、それを円滑に行う直近の方法を知りたいというような思いがあったように思います。最初のうちは、院で行われるコースや世代が異なる院生同士のクロスセッションに対して、なぜこのやり方をするのだろうかと感じることがありました。しかし、長期実践報告を書き終え、もう一度院での学びについて振り返ったとき、ようやくその意義が実感できるようになりました。

私は長期実践報告に、自分自身が「若い世代」だった頃の子どもの関わり合いについて記録しました。マネジメントコースなら、もっと最近の実践にのみ焦点をあてればよかったのでは？と自分でも迷いながら、やはり書いておきたいと思った背景に、教職大学院で出会った若手の先生達やクロスセッションの影響があったことに気がつきました。カンファレンスでは、同じコースや修了された先生方のバイタリティある先進的な実践に感嘆し憧れることが多くありました。そしてそれと同時に、若手の先生方から語

られた子どもたちの言動や、語り手自身である若手の先生方の思いや悩みつつも確実に成長されていく姿から熱いものが伝わってきていました。

それが私の中に静かに蓄積されていき、自分の中に過ぎ去ったこととして埋もれていた「大切なもの」を呼び起こしていました。自分自身も経験していた「この子をわかりたい」という思い。子どもを必死で見つめたり、人同士の違いやずれにもがいたりした経験。2年前の自分では気づくことができなかった、足元の大切なことをもう一度拾い直すことができたように思います。

教職大学院での時間は、これまで生き急いで来た私に、立ち止まって考える貴重な時間をもたらしてくれました。そして、長期実践報告を作成する2年間、自分の過程を真摯に見つめ、これまでの実践や思いを整理し、自分自身に出会い直すかけがえのない時間をもたらしてくれました。

4月からは、新しい職場、新しい役割が私を待っています。正直、未知への大きな緊張はあります。しかし、この長期実践報告作成により、これまでの自分自

身の教員としての歩みや大切にしたいことを整理できた後の異動は、絶好のタイミングのように感じています。整理されたすっきり感とともに、勇気と希望

をもって、再出発です。また、出会う時間が始まりです。

2年間で振り返って ～語り合う・聴き合うことの大切さ～

学校改革マネジメントコース 2022年度修了生

栗東市子ども青少年局幼児保育課

内田 祥子

2年前、教職大学院での学びが始まるとともに、職場も異動となり初めて行政での仕事を体験することになりました。さらにコロナ禍で、感染状況が変化するたびに予定していた事業の変更や中止を余儀なくされる中、今まで保育現場で経験したことを行政の立場の中でどのように生かしていけるのか、また自分に何ができるのだろうかと考え、悩む日々を過ごしていました。そのような中で、毎月のカンファレンスでの語り合いは、私にとって気持ちを落ち着かせ自らを振り返り、また次の日からの実践に向かう力を与えてくれました。

『語り合い、聴き合う』ということが、こんなにも心に響き、新たな自分に気づかせてもらうことに繋がるのだと実感しました。なかなか実践が進んでいない私の語りの中にも、聴いてくださる先生方が、これから私が挑もうとしている実践の意義や価値を見出してくださり、勇気づけてくださったこと、本当に有難かったです。新たな立場の中で、自分が目指していきたいこと、現状では難しいかもしれないけれどやっていきたいと考えていることをカンファレンスの中で、引き出してくださったように感じます。カンファレンスは、語りながら自分自身に気づいていく、そんな大切な時間でした。そして自分自身がこうしていきたいと言語化することで、実践を少しずつ進めることができましたと感じます。

また様々な場で実践されている先生方のお話を聴かせていただく中で、自分の実践にも参考にさせていただくことがたくさんありました。私は、子どもの

遊びの中の学びの姿を見とり、就学前での学びを具現化し、その連続性を意識して小学校へと繋げていくことが重要であると考えています。そのためには、まず保育の中で子どもの姿をしっかりと見とることができるように保育者側の力をつけていくことが重要です。保育者同士が保育を見合い、子どもの姿から学んでいくことが大事であり、そこには保育者間での学び合う環境作りが必要であることを実践の中で気づいていきました。先生方がそれぞれの校舎で、職場での学び合いをいかに負担感なくできるように考えておられることや一緒に学んでいこうとする仲間を増やしていかれていることなど、様々な取組みを聴かせていただくことは、大変貴重な機会でした。

2年目の最後に、長期実践報告を書くという作業については、私にとっては想像以上に大変なものになりました。自分の今までの実践を振り返りながら書いてはみるのですが、振り返る中で様々な想いが溢れてきて、その想いに浸っているとなかなか文章に表せない、そんな日々が続きました。その中で「誰に読んで欲しいのかを考えたら書きだしやすいのでは」とアドバイスをいただき、読み手を想定しながら書き進めていきました。今の所属においての実践はまだ始まったばかりで、悩みながらの現状しか表せていないのですが、月日をかけて『自分を振り返る』という大切な時間を過ごしました。書き終えた今、思うことは今の自分の精一杯のものであると同時に、まだまだこれから実践のページを重ねていかなければいけないということです。

豊かな学びをいただいた2年間は、本当にあっという間でしたが、これからはその学びを生かし、自分がどう実践を継続していくのか、また新たなスター

トに立った思いです。保育を語り合う繋がりをより確かなものにしていくため、私自身、これからも学びの主体者であり続けたいと思います。

教職大学院での学び

学校改革マネジメントコース 2022年度修了生

福井県立大野高等学校定時制

上中 一司

2年前の教職大学院の入学式を鮮明に覚えています。暖かい晴れた日で、希望に胸を膨らませました。2年間はあっという間に過ぎ職場も変わりました。入学した頃は、コロナ感染症第4波が来ている時期で、カンファレンスはオンラインが中心でした。

入学して間もない4月のカンファレンスでは、3つの種がテーマでした。3つ目の種である「教職大学院で深めていきたいこと」で私は、①福井県の理科教育の発展のための学び、②様々な実践に触れ見識を高める、③様々な人の意見を聞いて多面的な視点を持つようになることを発表しました。2年間の教職大学院に通わせていただき、3つの学びを深められたように感じます。それは、教職大学院で「出会い」、「最新の実践の学び」、そして「省察からの学び」があったからです。

出会いにおいては、教授の先生方、学生の方々、そして、本を通して著者からの出会いがありました。私は、カンファレンスにオンラインで参加しました。それは、オンラインであると県外の参加者と話す機会が多くなると感じたからです。沖縄、東京サテライト、また私立学校から不登校専門の中学校まで、様々な立場の参加者と意見を交換することができました。同じ文科省の学習指導要領をもとに教育に携わっていても、それぞれの立場で異なる悩みを持ちながらも実践を進めていることを知り、新しい視点、価値観とともにエネルギーをもらいました。また、カンファレンスでファシリテーターを務めていただく先生方

からのアドバイスや私の足りない部分の指摘をいただいたことは、私自身の新たな発見に繋がりました。また、ファシリテーターの先生方が、カンファレンスにおいて先生方の実践を価値づけていくことは「価値づけ」という新たな視点をもたらったと感じています。

最新の実践の学びについては、麴町中学校の取り組みが印象的でした。本で読んだだけで漠然と捉えていた内容が、麴町中学校に勤務されている先生の話聞きリアルに感じることができました。また、様々な講演会の紹介があることも魅力的でした。教職大学院のサマーサイクルで読んだ「専門職としての教師の資本」の著者であるアンディ・ハーグリーブス氏の講演は、ハーグリーブス氏の協働を中心とした学びの重要性を、生の講演で聴くことで再確認できました。また仕事に悩んでいた時に、世田谷区立桜丘中学校の、校則なし、授業に無理に出席する必要なしなどの学校改革で知られる西郷孝彦氏の講演を聴くことができたことも印象的でした。それらの講演の内容は、悩んでいた私に染みこむようになってきたことを思い出します。

省察的な学びについては、入学して最初の頃のカンファレンスでは、結論のでない話し合いにモヤとした感覚を覚えました。しかし慣れてくると、自分の考えを整理することができ、また、話しているうちに浮かんでくる内容が、新しい発想であったりと、新しい自分を知る体験でした。この体験は、免許更新制

が終わり、校内研修の充実が求められる中で研修の重要な要素になっていくと考えられます。省察を体験できたことは、私にとって大きな収穫でした。

教職大学院での学びは、日頃の生活では得られないものばかりでした。おかげで2年前の自分より成長でき、多様な価値観、考え方ができるようになった

と感じています。これは、教職大学院のカリキュラムの素晴らしさ、先生方の教育観の凄さ、そして真剣に実践に取り組む学生仲間のおかげであると感じています。教職大学院で出会った全ての方々に感謝いたします。私自身も、教職大学院の学びをさらに深め成長していきたいと思います。



修了生に贈る言葉



感謝と新たな出発に向けて

学校改革マネジメントコース2年/宮古島市教育委員会

砂川 誠

2023年3月28日、福井大学連合教職大学院の「令和4年度 学位伝達式」が開催され、オンラインで参加しました。

修了生一人一人の名前が読み上げられ、沖縄県の宮古島、多良間島のお二人の先生のお名前も呼ばれました。宮古圏内で初の福井大学連合教職大学院修了生の誕生です。

「本当におめでとうございます！」

お二人の先生は、2021年度から福井大学連合教職大学院の宮古島市で初の院生として主に東京サテライトを拠点に学びを進めてきました。何事も初めての事に挑戦することは大変な事だと思います。試行錯誤することも多かったと思いますが、後に続く私を含め、宮古島の教職員の新たな学びの道を切り拓いていただきました。お二人が手にした「学位記」は先生方だけでなく、宮古島市の大きな財産となったのではないのでしょうか。

先生方とは、この1年間一緒に学ぶ機会をいただきました。常に前向きで、真摯に学ぶ姿にいつも励まされてきたように思います。

特に宮古島でのラウンドテーブル開催に向けて共に取り組めたことは大きな財産となっています。宮古島ラウンドテーブルが実施できたことは、宮古島の教育にとっては大きな一歩になりました。

当日、実行委員長が、体調不良により参加できないというハプニングがありましたが、宮古島の先生方に新しい学びのスタイルを伝えられたこと、宮古島以外の多様な先生方と「対話」を通して学びを深める機会を作れたことは良い経験だったと思っています。

4月から先生方は、新しいステージでのスタートですね。先生方が、大学院での学びを生かして「新しい学びを支える学校組織づくり」や「子どもの学びの伴走者」として、教職員や子ども達と一緒に探究している姿が目に見えます。

お二人の先生のこれからのご活躍をととても楽しみにしています。

また、再出発のカンファレンスでは、修了生の方に大学院での学びを振り返り、今後の展望について語り合う機会となりました。

これまでの自分の長い実践を省察し、長期実践報告書を書くということはとても大変なことだったと思います。

「苦しかったけど、教員人生だけでなく、自分自身の人生を振り返り、長期実践報告書を書く中で、私は一生懸命頑張ってきたと捉え直すことができた。そして、学ぶってどういうことか学んだ。学ぶ事ってこんなにも面白いことに気づき、つながる、協働的に学ぶ大切さについても知った。」

というようなお話をされていました。その言葉にはとても説得力がありました。

「自分の学びを言語化し捉え直していくこと」

私も1年後には、自分の言葉で自分の実践を語り、その思いを伝えられるようになりたいと思いました。

そして、3月25日には、福井大学連合教職大学院東京サテライト「2022年度長期実践研究報告会」が開催されました。

それぞれの実践を自分の言葉で生き生きと語り、報告時間が足りないくらいでした。その報告を聞きながら、来年度、自分もこの場に立てるようしっかりと学びを深めていこうと決意を新たにしました。(その後の「エールの交換会」では不安が増す場面もありましたが・・・)

そして、今、私は教職大学院での1年目の学びを終えようとしています。これまで経験したことのない、新たな学びのスタイルに戸惑うことも多く、ご迷惑をおかけすることもありましたが、修了生の皆様には、常に声をかけていただき、学びを支えていただきました。

大学院での学びを終え、新しい出発が実り多きものになることを心より願っています。本当に1年間ありがとうございました。



スタッフから贈る言葉



再出発の会で考えたこと

福井大学連合教職大学院 教授 淵本 幸嗣

学位記伝達式に続く再出発の会で考えたことを修了生の皆さんにお伝えしたいと思います。修了生の皆さんは、Zoomの画面越しでしたが、ほっとされているようで笑顔がとても素敵でした。これは、苦しみながらも長期実践報告書を書き上げた安堵感と印刷

された冊子が手元にあることの満足感からくるものと拝察しました。そのやり取りの中で私はファシリテーターをさせていただきました。「今、考えていることについて、自由に話してみてください。」とい

う私の問いかけに、修了生の皆さんは少し戸惑いながらも、とても興味のある話を始めてくれました。

「教職大学院でのことについて、何でもいいので自由に話してください。」というようなざっくりとした問いかけに、ギャラリーの皆さんも驚いていました。振り返ってみると、昨年の再出発の会でも同じようなことをして、同じようなことを言われました。普通は、話をするテーマというか、話の仕切りをするようです。しかし、私はそうしませんでした。「それはなぜだろう？」と自問自答してみると、そのような仕切りをすると相手を窮屈にしてしまうのではないかと、それは、失礼なことだろうと考えたからです。そして、何より修了生ファーストで修了生の皆さんが、最後に何を語るのかということをお聞きしてみたい。そのことに興味があるから、というのが正直なところでした。

教職大学院のカリキュラムを修了された皆さんは、どの人も自分の歩みを省察して、気になっていることに光を当てて語ってくれました。その内容は一様ではなく、それぞれの個性が感じられました。そして、

その語りの中から探究的な実践者としての辛さ、楽しさ、面白さが伝わってきました。「教職大学院での学びは楽しかった。」という感想についても、それはなぜだろうとみんなで考えました。限られた時間でしたが、表面的な理解ではなく、「そのことの本質は、どういうことなんだろう。」という深い学びへと誘われていきました。このような時間はあっという間で、とても心地よいものでした。

続きは、各自が額に汗して分散型のコミュニティの大地を耕しましょう。そして、そのプロセスに光を当て、成果物や失敗について、また、ラウンドテーブルで紹介していただけたらうれしいです。これからも修了生の皆さんが幾重にもつながって渦を広げていくと思うと、少しも寂しくありません。むしろ、今からワクワクとしています。学び続ける省察的实践者として、協働探究者として、それぞれのコミュニティを豊かなものにしていきましょう。

修了生の皆様の今後、益々のご活躍を心からお祈り申し上げます。



退任にあたって



1割を心に留めて

信州大学教育学部附属長野小学校(元福井大学連合教職大学院) 宮下 正史

教職に長く従事していると、いつしか自分が何でもできるかのように錯覚を起こすことがある。号令をかければ子どもたちが集まり、指示を出せば多くの子どもたちは従ってくれる。提出物をチェックし

て、未提出があれば提出をさせる。その学級の中のほとんどの出来事は管理できる。もし何かうまいかかないのであれば相手のせい、子どもたちのせいにしてしまいそうになる。30歳前後の私はそうであっ

たと思う。いくらか経験を重ねて、一通り授業も流せるようになる頃である。自分が構想した授業に乗れない子ども、目指す学級経営にハマらない子どもは、私ではなく相手が悪いのである。教師は経験に学ぶ、しかし経験のみに頼る教師は、自分にとって最適な授業や学級経営のパターンを組み、まさにうまく流していくのである。

そんな私の教師観を変えたのもまた子どもたちだった。学校のルール、大人のルールに悉く反抗した子どもたちとの1年間の生活が、私を成長させてくれた。授業時間になっても教室にいない子どもたち、問いかけても返事がない教室、それまでの経験は通じずに、毎日常字通り格闘しながら授業を作っていた。そうやって時間をかけて無気力だった子どもたちの目が変わっていった時のやりがい、表情と言葉が柔らかくなっていく教室。瞬時ではない。空気がじわじわと変わっていく。子どもたちが教室に戻ってくる。子どもたちの目が生き生きとしてくる。それでも1年間、世の中の「当たり前」という目で見れば、まだまだこれからというところで巣立っていった子どもたち。この子どもたちとの出会いがなければ今の私は毎日の作業を「こなす教師」になっていただろう。今思えば、あの子たちは、私の鏡であったのだと思う。不遜になりかけていた私への戒めであったと思う。学んでいたのは私だったのだ。

昨日授業をしたのだから、今日には全員できていることが当然のように思っていないだろうか？自分が話をすれば、一人残らず全員に伝わっていることが当たり前と思っていないだろうか。教師は神様ではない。だが教室の中でなろうとしてしまう。子どもが35人にいれば、伝わるのは1割である。一度で覚えるほどの内容ならば、もともと苦労して教える必

要もない。さらに歩みのペースは個々多様であり、何より自分自身がこれまでの教育で全てを一度で体得してきたわけでもない。3割自分の話を覚えていけば上出来である。逆に言えば、1割であっても、時間をかけて着実に伝わり、広がり醸成されていくものがあるのも教育の事実である。教師という名を盾に教室の神様になろうとすることを止めよう。

自分が不遜に陥らないためにできることは、自らが学び続けることである。学び続ける教師は、常に外に開き、出会いを求める。出会いが、今の自分を照らし出し、自分の当たり前を揺さぶってくれる。他者との出会いは、子どもたちとの出会いももちろんだが、ラウンドテーブルなどの機会を外に求め、足で稼ぐことも怠ってはならない。自分の生活圏から遠い方が学びは大きい。

昭和初期、信州の教育現場に足繁く通った教育学者木村素衛の文章に以下のような言葉がある。

真の教育は縁の下の力持ちである。目立たないところにあつて然も発達して行く文化の根底を養って行くところに教育の本領がある。教育にたずさわって行く者は無名の戦士であることに無限の誇りと満足とをもつ者でなくてはならない。

私は、福井の地で多くの出会いをいただき、自分自身を作り直しました。ともに学んだ院生のみなさんに教えていただきました。最後に教室へと戻る修士生の皆さんと私自身に対して贈る言葉です。

「教師は主役の座を降りてください。教室の主役は子どもたち一人一人です。」

「謙虚」と「矜持」を胸に実践者として研鑽を積んでいきたい。全ての皆様ありがとうございました。

ともに生きる、ということ

奈良女子大学附属幼稚園 松田 登紀

コロナ禍の3年間、教職大学院で本当に多くを学ばせていただく貴重な機会を頂き、ありがとうございました。

職場である奈良女子大学附属幼稚園では、一市民としての子どもと私達が、ともに生き、ともに社会を創造していくことを大切にしたいと考えています。その幼稚園での営みを支えているのは、間違いなく教職大学院での様々な出会いであり、学びでした。これまで、聞いているつもりで聴こうとしてこなかった子ども達の声が聴こえてくる喜びと、ともに生きることで意味が生成される面白さは、この教職大学院での出会いと学びがなければ決してなかっただろうと振り返ります。そして、カンファレンスやラウンドテーブルでいただいた皆さんの語りや言葉が、彼らと生活を営む中で新たな気づきとなって立ち上がり、さらなる学びを生み出していました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

4月から担任していた子ども達が就学します。これまで子ども達の就学は「期待」「不安」「適応」などの概念で単純化して捉えていましたが、いざ自分が新生活に一步踏み出すとなると、移行期はそれほど簡単に捉えられないことがわかります。またここでも子ども達の声を聴いて幼小移行期を捉え直していく必要性を感じています。

「次の始まりがあるから、終わらないといけないんだよ」とは、今の生活を名残惜しむ私の背中を押してくれた、担任していた5歳の子どもの言葉です。一人の人として彼らと、そしてこれまで出会ってきた皆さんと、そしてこれから出会う皆さんと、ともに生き、互いに学び合い、学び続けたいと思います。ありがとうございました。そして、これからもよろしく願いいたします。



年間予定表



2023年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画 配付用(案) 2023.4.2現在		
4	1 土	開講式 10:00-12:30 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom 福井・岐阜 特別支援教育ゼミ
	2 日	2 金 週間カンファレンス
	3 月	3 土
	4 火	4 日
	5 水	5 月
	6 木	6 火 4系授業
	7 金	7 水
	8 土	8 木
	9 日	9 金 週間カンファレンス
	10 月	10 土 特支ゼミ13:00-16:00 授業予備日
	11 火	11 日
	12 水	12 月
	13 木	13 火 4系授業
	14 金	14 水
	15 土	15 木
	16 日	16 金 週間カンファレンス
	17 月	17 土 シンポジウム 13:50-17:00
	18 火	18 日 ラウンドテーブル 6:20-14:00
	19 水	19 月
	20 木	20 火 4系授業
21 金	21 水	
22 土	22 木	
23 日	23 金 週間カンファレンス	
24 月	24 土	
25 火	25 日	
26 水	26 月	
27 木	27 火 4系授業	
28 金	28 水	
29 土	29 木	
30 日	30 金 週間カンファレンス	
5	1 月	1 土 月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンライン会場: 福井・小浜・岐阜・東京 オンライン: Zoom 特支ゼミ15:00-17:00
	2 火	2 日
	3 水	3 月
	4 木	4 火 4系授業
	5 金	5 水
	6 土	6 木
	7 日	7 金 週間カンファレンス
	8 月	8 土 月間合同カンファレンスB 9:30-14:00
	9 火	9 日
	10 水	10 月
	11 木	11 火 4系授業
	12 金	12 水
	13 土	13 木
	14 日	14 金 週間カンファレンス
	15 月	15 土
	16 火	16 日 運営協議会(オンライン)
	17 水	17 月 海の日
	18 木	18 火 授業予備日
	19 金	19 水
	20 土	20 木
21 日	21 金 ※それぞれaかbいずれか一方に出席	
22 火	22 土 夏期集中講座Cycle1a* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom	
23 水	23 日	
24 木	24 月	
25 金	25 火 社会教育 中堅研修 第1期	
26 土	26 水 夏期集中講座Cycle1b* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom	
27 日	27 木	
28 月	28 金 ※それぞれaかbいずれか一方に出席	
29 火	29 土 夏期集中講座Cycle2a* 8:30-17:00	
30 水	30 日	
31 木	31 月	
6	1 火	1 火 夏期集中講座Cycle2b* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom
	2 水	2 水
	3 木	3 木
	4 金	4 金 ※それぞれaかbいずれか一方に出席
	5 土	5 土
	6 日	6 日 夏期集中講座Cycle3a* 8:30-17:00 オンライン会場: 福井・岐阜 オンライン: Zoom
	7 月	7 月
	8 火	8 火 オープンキャンパス
	9 水	9 水 附属特支公開研究会
	10 木	10 木
	11 金	11 金 山の日
	12 土	12 土
	13 日	13 日
	14 月	14 月
	15 火	15 火
	16 水	16 水 夏期集中講座Cycle3b* 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom
	17 木	17 木
	18 金	18 金
	19 土	19 土
	20 日	20 日 特支ゼミ9:00-16:00
21 月	21 月	
22 火	22 火	
23 水	23 水	
24 木	24 木	
25 金	25 金	
26 土	26 土	
27 日	27 日	
28 月	28 月 入試事前説明会①(オンライン)	
29 火	29 火	
30 水	30 水	
31 木	31 木	
7	1 金	1 金
	2 土	2 土
	3 日	3 日
	4 月	4 月
	5 火	5 火
	6 水	6 水
	7 木	7 木
	8 金	8 金
	9 土	9 土 特支ゼミ9:00-16:00
	10 日	10 日
	11 月	11 月
	12 火	12 火
	13 水	13 水
	14 木	14 木
	15 金	15 金
	16 土	16 土
	17 日	17 日 夏期集中講座Cycle3C* (予備日) 8:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom
	18 月	18 月
	19 火	19 火
	20 水	20 水
21 木	21 木	
22 金	22 金	
23 土	23 土 推薦入試1	
24 日	24 日	
25 月	25 月	
26 火	26 火	
27 水	27 水	
28 木	28 木	
29 金	29 金	
30 土	30 土 特支ゼミ13:00-15:00	
8	1 土	1 土
	2 日	2 日
	3 月	3 月
	4 火	4 火
	5 水	5 水
	6 木	6 木
	7 金	7 金
	8 土	8 土
	9 日	9 日
	10 月	10 月
	11 火	11 火
	12 水	12 水
	13 木	13 木
	14 金	14 金
	15 土	15 土
	16 日	16 日
	17 月	17 月
	18 火	18 火
	19 水	19 水
	20 木	20 木
21 金	21 金	
22 土	22 土	
23 日	23 日	
24 月	24 月	
25 火	25 火	
26 水	26 水	
27 木	27 木	
28 金	28 金	
29 土	29 土	
30 日	30 日	
31 月	31 月	
9	1 火	1 火
	2 水	2 水
	3 木	3 木
	4 金	4 金
	5 土	5 土
	6 日	6 日
	7 月	7 月
	8 火	8 火
	9 水	9 水
	10 木	10 木
	11 金	11 金
	12 土	12 土
	13 日	13 日
	14 月	14 月
	15 火	15 火
	16 水	16 水
	17 木	17 木
	18 金	18 金
	19 土	19 土
	20 日	20 日
21 月	21 月	
22 火	22 火	
23 水	23 水	
24 木	24 木	
25 金	25 金	
26 土	26 土	
27 日	27 日	
28 月	28 月	
29 火	29 火	
30 水	30 水	
31 木	31 木	

2023年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画 配付用(案) 2023.4.2現在				
10	1 日			
	2 月	後期授業開始		
	3 火	4系授業		
	4 水			
	5 木			
	6 金	週間カンファレンス		
	7 土			
	8 日			
	9 月	スポーツの日		
	10 火	4系授業		
	11 水			
	12 木			
	13 金	週間カンファレンス		
	14 土			
	15 日			
	16 月			
	17 火	4系授業		
	18 水			
	19 木			
	20 金	週間カンファレンス		
	21 土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンライン会場:福井・岐阜 オンライン:Zoom 特支ゼミ15:00-17:00		
	22 日			
	23 月			
	24 火	4系授業		
	25 水			
	26 木			
	27 金	週間カンファレンス		
	28 土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00 オンライン会場:福井・東京 オンライン:Zoom		
	29 日			
	30 月			
	31 火	4系授業		
11	1 水			
	2 木			
	3 金	文化の日		
	4 土			
	5 日			
	6 月			
	7 火	4系授業		
	8 水			
	9 木			
	10 金	週間カンファレンス		
	11 土	推薦入試2		
	12 日			
	13 月			
	14 火	4系授業		
	15 水			
	16 木			
	17 金	週間カンファレンス		
	18 土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンライン会場:福井・岐阜 オンライン:Zoom (長期実践報告作成のためのガイダンス14:30-)		
	19 日			
	20 月			
	21 火	木曜授業		
	22 水			
	23 木	勤労感謝の日		
	24 金	週間カンファレンス		
	25 土	月間合同カンファレンスB 東京 9:30-14:00 (長期実践報告作成のためのガイダンス14:30-) 東京RT		
	26 日			
	27 月			
	28 火	4系授業		
	29 水			
	30 木			
	12	1 金	週間カンファレンス	
2 土		特支ゼミ13:00-16:00		
3 日				
4 月				
5 火		4系授業		
6 水				
7 木				
8 金		週間カンファレンス		
9 土			授業予備日	
10 日				
11 月				
12 火		4系授業		
13 水				
14 木				
15 金		週間カンファレンス		
16 土				
17 日				
18 月				
19 火		4系授業		
20 水				
21 木				
22 金				
23 土		冬期集中講座a 9:30-17:00 オンライン会場:福井・岐阜・東京 オンライン:Zoom	授業予備日	
24 日				
25 月			中堅研修 第IV期	
26 火		予備日		
27 水				
28 木				
29 金				
30 土				
31 日				
1	1 月			
	2 火			
	3 水			
	4 木			
	5 金	冬期集中講座b 長期実践研究報告の作成 9:30-17:00 オンライン会場:福井・東京		
	6 土			
	7 日			
	8 月	予備日 長期実践研究報告の作成		
	9 火	4系授業		
	10 水			
	11 木			
	12 金	週間カンファレンス		
	13 土	大学入学共通テスト(予定)		
	14 日	大学入学共通テスト(予定)		
	15 月			
	16 火	4系授業		
	17 水			
	18 木			
	19 金	週間カンファレンス		
	20 土			
	21 日			
	22 月			
	23 火	4系授業		
	24 水			
	25 木			
	26 金	週間カンファレンス		
	27 土			
	28 日			
	29 月			
	30 火	4系授業	授業予備日	
	31 水	長期実践研究報告締め切り 週間カンファレンス	金曜授業	
2	1 木		岐阜RT	
	2 金	週間カンファレンス予備日		
	3 土	第1回入試		
	4 日	長期実践研究報告会 9:30-12:30		
	5 月			
	6 火			
	7 水			
	8 木			
	9 金			
	10 土			
	11 日	建国記念の日		
	12 月			
	13 火			
	14 水			
	15 木			
	16 金			
	17 土	シンポジウム 12:00-17:40		
	18 日	ラウンドテーブル 8:20-14:00		
	19 月			
	20 火			
	21 水			
	22 木			
	23 金	天皇誕生日		
	24 土			
	25 日	学部個別試験(前期)		
	26 月			
	27 火			
	28 水			
	29 木			
	3	1 金		
		2 土	第2回入試	
3 日		特支ゼミ9:00-15:00		
4 月				
5 火				
6 水				
7 木				
8 金				
9 土				
10 日				
11 月				
12 火		学部個別試験(後期)		
13 水				
14 木		運営協議会		
15 金		インターンシップ説明会		
16 土				
17 日				
18 月				
19 火				
20 水		春分の日		
21 木				
22 金			学位授与式	
23 土		学位記伝達式 18:00-20:00		
24 日				
25 月				
26 火				
27 水				
28 木				
29 金				
30 土				
31 日				



令和四年度
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
学位記伝達式
2023年3月23日（木）
於 コラボレーションホール・オンライン



Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】2022年度は62名が教職大学院を修了しました。そして、2023年度は66名の新たな院生を迎え、新たな学びのサイクルに移行していきます。今年度のNewsletterも皆様の寄稿に支えられながら、発行していきたいと思えます。本教職大学院も皆様とともに学びを深めながら、教師教育のあり方を探っていきたく思います。素敵な2023年度にしていましょ。 (2023年度Newsletter担当一同)

教職大学院 Newsletter

No.169

2023. 4. 17 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp